おちさんの風

日頃は越智氏奉賛会に一方ならぬ関心、お力添えをいただき誠にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

昨年はクルーズ船での感染に始まった新型コロナウイルスの蔓延で、現在もその脅威でなかなか先の読めない状態にあります。奉賛会の活動も思うに任せず、秋のフィールドワークで、曽和城跡や国見山のハイキングのみとなってしまいました。しかし、これは内容もある楽しい行事になったかと自画自賛しています。

私個人のことで恐縮ですが、このコロナ禍の日常では、これまでのように体を動かすことが困難で、どうすれば体力の衰えを防ぐか悩んでいます。今まで通っていたスポーツジムは感染が気がかりで退会してしまいました。１日２万歩のウォーキングも思うに任せません。山仲間との登山も少なくなりました。平地を歩くだけではトレーニングには不十分で、筋肉の衰えをいかに防ぐかが目下の課題です。

奉賛会７人の役員の皆さんは多士済々で、それぞれの異なった能力を使えば、どんな事業、行事も可能かと思っていますが、あいにくの現況下では力を発揮していただく機会が全くありません。１日も早い、コロナ禍の一掃、日常の回復がなされ、越智氏奉賛会が活発に活動でき、光雲寺に人々があふれることを祈るばかりです。

桜の花に誘われて人混みに出たくなる季節になりましたが、ご自重ご自愛くださいますようお願い申し上げます。

（会長　米田徳七郎）

令和２年度活動報告

令和２年

３／28（土）
第２回役員会開催
２年度の活動計画を審議。
＊新型コロナウイルス感染防止のため、おちさんの集い（総会）の中止を決定し、それに伴い総会を書面決議にて報告することとなる。

４／４（土）
楠公ツーリズム代表観心寺様より「楠公さん」ゆかりの寺社プレゼンフォーラム開催の延期の連絡が入る（新型コロナウイルス感染予防のため）。

４／６（月）
会員各位に元年度の総会書面決議書を発送

５／20（水）
例年参加協力行事「高取町ふるさと夏まつり」について、実行委員会は開催中止を決定（新型コロナウイルス感染予防のため）。

８／29（土）
第３回役員会開催
秋の歩こう会・フィールドワークについては野外での活動となるため、感染防止に留意しながら開催を決定。コースの中身を審議。

10／４（日）
役員によるフィールドワークのコース下見

11／23（祝）
フィールドワークコースのうち、曽羽城址までの道普請・除草作業

11／28（土）
フィールドワーク・秋歩こう会開催　総勢35名参加
光雲寺集合出発→国史跡市尾墓山古墳→国史跡宮塚古墳→中世城郭・曽羽城址→嘉太神社（神農さん）→（株）三光丸様にて昼食・休憩→国見神社→国見山頂上→ＪＲ掖上駅→光雲寺・解散

令和３年

１／17（日）
第１回役員会を光雲寺方丈にて開催。コロナ禍の影響は多少あれども年３回の行事を中心に年間スケジュールを企画。

令和３年度の活動予定

春　５月８日（土）
〝おちさんの集い〟（総会・歴史講演会＝シリーズ「大和の中世は面白い」）

夏　８月28日（土）
〝おちさんの夜あかり〟夜間拝観ライトアップ

秋　11月27日（土）
フィールドワーク（歩こう会）壺阪寺高取城跡方面

（諸事情により変更あります）

以上、事務局より）

フィールドワーク・秋の歩こう会に参加して

一昨年に越智氏奉賛会に入会させて頂いた私にとって、昨年11月28日に開催された曽羽城跡、国見神社などを巡る秋の歩こう会は初めてのフィールドワークでした。

昨年の春から蔓延し始めたコロナウイルス禍の影響のため、世の中の集会行事は自粛ムードでしたが、屋外での活動なので主催者が感染防止に配慮されて開催され、35名もの参加者がありました。

光雲寺を出発し、まずひとつ目の見学地の市尾墓山古墳へ。ここは前方後円墳丘の上まで登りました。次に天満宮の大楠の植えられた階段を上り、2つ目の市尾宮塚古墳はボタンを押すと照明が点灯して石室の中を見ることができます。

今住地区は三光丸をはじめ製薬会社が集まっていますが、医薬と知恵の神様の少彦名命が祭られている嘉太神社、および曽羽地区の氏神の曽羽神社

を参拝した後、本日のメインターゲットの曽羽城址に藪をかき分けながらたどり着きました。なお、吉村副会長さんらが事前にチェーンソーで登りやすいように処理して下さったそうです。

近世の城のような石垣や櫓こそありませんが、越智党の重鎮・米田氏の本拠とされる曽羽城は、中世の山城跡として特有の、平坦な主郭とそれを取り巻く土塁および二重の空堀などの遺構が残っています。

現在の曽羽城址は周りを樹木に囲まれて見渡すことはできませんが、越智氏の平時の居城の越智城や詰めの貝吹山城、佐田城などに対して南端にあり、合戦時は狼煙を上げれば連絡し合えたことでしょう。

山城址から下ってから三光丸さんに向かい、昼食休憩を取りつつ、併設されているクスリ資料館を浅見館長に案内して頂きました。

昼食後は、体力のある有志に絞って(と言っても大多数が参加)、日本書紀で神武天皇が国見をしたとの伝説がある国見山(229m)と、その中腹にあり瓊瓊杵尊を祭神として祭る国見神社に向けて出発し、ほぼ予定通りの時刻に無事光雲寺に戻りました。参加された皆様、日頃の行いが良かったせいか天候に恵まれ、お疲れ様でした。

(吉村哲治)

金剛・葛城山麓で活動する「かづらき煌ネットワーク」のご紹介

西に金剛山は牛の如く、葛城山は鯨の如く雄大に聳えています。そしてその山麓に「葛城古道」が南北に通じています(御所市葛城山登山口から風の森まで約13㎞)。

東には、巨勢山丘陵、ご来光を拝す宇陀・吉野の霊峰など、眼下に奈良若草山・大和三山を眺望できる風光明媚な自然景観に恵まれています。

さらに、天孫降臨の高天原、古代豪族葛城氏・鴨氏の本拠地、役行者・行基菩薩・弘法大師空海の修行開創地など豊かな古代史と霊験あらたかな神社仏閣が点在しています。本会は葛城を愛する同志が集い、平成26年3月発足しました。歴史の研鑽、文化財の発掘保存、地域の環境整備や景観づくり、各種イベントなどを通じて会員相互の交流親睦を図っています。会名の由来は次の通りです。

「かづらき」＝日本書紀神武天皇即位記「高尾張邑に身短く手足長い土蜘蛛おり、葛(かづら)の網で退治した。よりてその邑を名付けて葛城(かづらき)と曰く」

「煌(きらめき)」＝輝き、明るいさま、大きく拡がる➡活気・活発

「ネットワーク」＝網目のような繋がり・絆

以下は活動状況(実績・継続中)です。

一、歴史の研鑽　「葛城を知ろう」研修会(室内・郊外)年6回

二、文化財の発掘保存　葛城三十八景漢詩の歌碑建立(平成30年6基、令和元年5基)

三、環境整備・景観づくり　道の整備、草刈、花木植栽、階段・手すり・道標の設置(毎年6月・10月)葛城小学校・保育所校庭の草刈・剪定(毎年8月)

四、伝統料理教室　柿の葉寿司、小麦餅づくりなど(平成27年5月)

五、おもてなし　「葛城古道」ハイカーにおにぎり、芋煮、柿のふるまい(平成27年11月、28年12月)御所実業工業ラグビーフェスティバルに(毎年

7月）きゅうり、まっか、トマト、西瓜の差し入れ

六、イベント　御所市みんなの夢事業「流しそうめん」ギネス挑戦に協賛（平成28年8月）御所市制施行60周年記念事業参画（平成30年9月）串こんにゃく、小麦餅、山菜おこわのおもてなし

七、ホタル復活プロジェクト

人工飼育に挑戦（毎年5～7月）ビオトープ作る「天然かもきみの湯」周辺河川で「ホタルの夕べ」を目標にしています。

ホタルを復活させて葛城地域、特に「かもきみの湯」で夏の風物詩「ホタルの夕べ」を催すことを夢見て取り組む！

地元のホタルを捕獲して１０名で飼育し羽化後の育成むつかしく多くを死なせたが、３００～４００匹はビオトープに放流。その他約２００～３００匹は「かもきみの湯」周辺に放流

ビオトープ完成

ビオトープに放流

「かもきみの湯」に放流

これらの活動を評価されて、平成29年11月20日、国と県から地方自治法施行70周年記念に表彰されました。

令和2年度の活動は、コロナ禍で歴史の研修会は中止中です。

当地に、御先祖が楠木正成公に随従し鎌倉に下りし者となり、関東の状況をさぐり援助した人。湊川の合戦で殉死した末裔宅があります。

今後、越智氏奉賛会の皆さんと相互に交流できることを願望しています。

（福田　泰　かづらき煌ネットワーク　副会長）

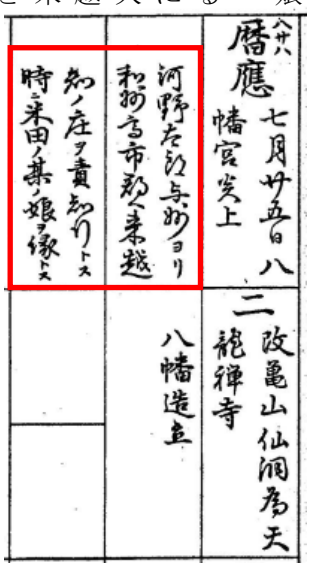
大和の中世は面白い
越智氏はどこから来たのか（前回の続き）

まずは前稿の続きを少々。越智氏の出自について、伊予の大族越智氏と大和の越智氏の関連性について、少々飛躍した考えを披露いたしましたが、飛躍ついでにもうひとつの史料をご紹介しましょう。

右下の表は明治41年に刊行された『興福寺年代記』の抜粋ですが、暦応元年（1338）七月二十五日条に興味深い記述があります。赤枠で囲んだ箇所がそれです。

「河野太郎与州ヨリ和州高市郡へ来越智ノ庄ヲ責知行トス時ニ米田ノ某ノ娘ヲ縁トス」

この記事を信じるならば、暦応元年に伊予の河野太郎が大和の高市郡に来て越智庄を手に入れ、米田家と縁組したことになります。



河野氏はもともと伊予国の越智氏の流れをくむ一族で、平安末期になると本家の越智氏に代わって歴史の表舞台に登場します。

興福寺年代記の記事は、大和の越智氏は伊予国の（越智氏の流れをくむ）河野氏とつながると言っているのです。前回も述べましたが、想像をたくましくするならば、河野氏の一員が伊予から大和に移住し、当時高市郡越智庄にいた大和源氏の末裔である越智氏と交流して（もしかすると当時衰退していた）その名跡を継いだのかもしれません。

さて、ここで問題となるのは史料の信頼度です。同書は、興福寺に伝わった種々の書付を歴史学者の坪井九馬三（つぼいくめぞう）と日下寛（くさかひろし）がまとめたものですが、それらの中には信頼性を欠く伝聞情報などもまぎれ込んでいるようです。

個人的には実にロマンあふれる内容だと思うのですが、米田家の祖、越智俊武が武功を上げ、播州米田の地から故郷に錦を飾り、米田氏を名乗ったのが元中八年（1391）ですから、残念ながら年代的につじつまは合わないようです。

鎌倉幕府滅亡のきっかけを作った越智氏

前置きが長くなりましたが、そろそろ本題に入りましょう。

越智氏が歴史の表舞台に登場してから、どのような活躍を遂げたのか、史料をもとにその足跡をたどっていきたいと思います。

越智氏の動向が史実として確認できるのは、鎌倉時代末期頃からです。

『越智氏の勤王』（以下、『勤王』と略す）によれば、第八代邦永（くにながの）のとき、相模入道（鎌倉幕府最後の執権・北条高時）が闘犬を好み、犬の飼料をまかなうために領地の一部を幕府に差し出すよう六波羅探題を通じて命令してきました。

元亨2年（1322）、これに憤慨した邦永は徹底抗戦を決意、六波羅の軍勢を散々打ち負かしましたが、続いてやってきた楠木正成（まさしげ）と戦い、奮戦むなしく討たれてしまいました。

越智邦永の名は、他の信頼できる史料には出てこないため実在の人物か否かは不明ですが、この時期、越智氏が鎌倉幕府に反抗したのは事実のようです。

当時の鎌倉幕府は御家人制度が破綻しつつあり、各地で悪党と呼ばれた武士集団が反乱を起こしていました。その代表格が摂津の渡辺党、紀伊の湯浅氏、津軽の安藤（安東）氏、そして大和の越智氏でした。楠木正成は新田義貞や足利尊氏とともに鎌倉幕府を滅ぼし、後醍醐天皇を助けた忠臣として名高い人物ですが、この時期はまだ北条家の家臣でした。「六波羅がだめなら楠木しかいない」ということで、幕府の命によって各地を転戦し、渡辺党と湯浅氏、そして越智氏をも鎮圧してしまいます。このとき、幕府は楠木氏の功績を称えると同時に、あまりの強さに危機感を覚えたといいます。正成もまた、反乱軍との戦いの中で幕府の崩壊を予見したのでしょうか。

元弘元年（１３２４）、後醍醐天皇による討幕計画が発覚し、帝が三千の兵とともに笠置山に立て籠もった際は、越智上野介、古市播磨守、楢原周防入道、柳生播磨守ら大和武士も帝を守って戦いましたが、その時すでに楠木氏は後醍醐天皇方に味方していたようです。

『太平記（巻三）』には、このとき後醍醐帝が霊夢を見たことがきっかけで、楠木正成が後醍醐天皇のもとに馳せ参じたという有名な逸話が記されています。

『勤王』によれば、越智邦永の一子邦澄が成長して越智家を継ぎ、やがて高取城を築くと、楠木正成の奮戦に呼応する形で討幕に参加しました。

邦澄にとって楠木正成は父の仇ともいえる人物ですが、そのいさぎよさと勤王の精神に共感したのでしょうか、元弘３年、正成が千早・赤坂城で幕府軍を迎え撃った際には、一族の楢原三郎光俊（越智十郎光度の子）を派遣し、共同戦線を築いています。

南朝の忠臣・越智氏

鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇による建武の新政が始められましたが、討幕に功績があった武家に十分な恩賞が与えられないなど政局は不安定な状態が続き、天皇と足利尊氏との関係は次第に悪化していきました。やがて尊氏が貴族政治に不満を持つ武士たちをまとめる形となり戦争が勃発。湊川の戦いにおける楠木正成の敗死が引き金となり、建武政権は崩壊してしまいます。

その後、後醍醐天皇は吉野で南朝を築き、半世紀もの間、南北朝時代が続くことになります。この間、越智氏は、伊勢国守護の北畠氏や楠木正成の子、正行（まさつら）・正時・正儀（まさのり）兄弟などとともに南朝方武将として活躍しました。

越智邦澄の子・家澄の頃になると、越智氏も南朝方の有力武将としての地位を確立していたようで、観応元年（１３４８　南朝方年号は正平５年）に足利尊氏の弟、足利直義（ただよし）が尊氏や高師直（足利家の執事）らと対立して南朝方に降伏した際、直義は越智氏を頼っています。

南北朝時代の大和国

では、南北朝期の大和国はどのような状態だったのでしょうか。地理的にも京都の北朝と吉野の南朝の中間に位置しており、紛争に巻き込まれた事は想像に難くありません。

当時、大和国では南都興福寺が強大な権力を握っており、大勢の大和武士たちを従えていました。

興福寺は全体として北朝方（室町幕府方）でしたが、内部では一乗院と大乗院という、二大門跡寺院の対立が表面化しつつありました。

やがて両者の確執は、互いの傘下にあった大和武士たちを巻き込む軍事衝突を引き起こし、南北朝の紛争と相まって複雑な様相を呈していきます。

名著『応仁の乱』で呉座勇一氏が喝破されたように、まさに当時の興福寺は「畿内の火薬庫」と呼ぶにふさわしい存在だったのでしょう。

さて、残念ながらここで紙幅が尽きてしまいました。この後の越智氏の活躍は、次回のお楽しみということに・・・。

やはり、「大和の中世は面白い」のです。　（浅見　潤）

おちさん草木記
「多羅葉（たらよう）」

光雲寺の山門をくぐり抜けて石畳を真っ直ぐ進み本堂の前まで来ると、右側は綺麗に掃き清められた玉砂利の広場があり、左側は庫裏の玄関に向かう石畳が続いている、その庫裏方丈から本堂に至る渡り廊下の屋根越しに、濃い緑色の大きな葉っぱをつけた立派な樹木が望める。

その木が（多羅葉）である。モチノキ科常緑樹、葉は大型で厚く、ふちには鋸歯と呼ばれるギザギザがあり、雌雄異株、光雲寺のものは11月頃赤い実をつけるので雌株である。

多羅葉の名前の由来は葉の裏に経文を書いたインド産ヤシ科の貝多羅葉（ばいたらよう）になぞらえたもので、社寺仏閣に多く植えられ、東大寺二月堂や下市町長谷にある丹生川上神社下社のものは霊木として崇められている。

光雲寺の多羅葉は幹回り約1.6メートルあり上記霊木に肩を並べる大樹である。

葉の裏に硬いもので文字を書くと黒く浮かび上がり、古来より恋文やちょっとしたメモ代わりに利用されていたようだ。

郵便葉書の名前の由来とも言われ、今でも定形外郵便物として切手を貼れば葉書として通用し、樹は（郵便局の樹）として各地の主要な郵便局で植えられシンボルツリーになっている。　（吉村基男）

編集後記

※お待たせしました。「おちさんの風」第３号をお届けします。

「かづらき煌ネットワーク」について寄稿してくださった福田氏は、越智氏奉賛会の会員であると同時に、同ネットワークの副会長もされています。

原稿を読んで、豊富な活動内容に驚きました。

今後、両者の交流を通じて、いろいろと学んでいきたいと思います。

※会員諸氏からの投稿をお待ちしています。また、催しに関するご意見・ご提案も遠慮なくお寄せください。皆様のご協力で、さわやかな越智さんの風を吹かせたいと願っています。（編集子）